

平成21年 6月 1日現在

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2007～2008

課題番号：19520388

研究課題名（和文） 日本語訓点資料を国際的に共有するための標準の構築

研究課題名（英文） Standard construction for diacritic manuscripts is shared internationally

研究代表者

小助川 貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)

富山大学・人文学部・教授

研究者番号：20201486

研究成果の概要：これまで日本語史研究に限定されていた訓点資料について、デジタル化時代の到来と研究の国際化という環境変化に対応するために、文献学的な書誌情報に基づくデジタル版目録の作成と国際的に共有できる客観的な解読記述方法の開発を目指すとともに、ICT（Information and Communication Technology）を駆使した新たな研究スタイルを模索した。

交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	2,000,000	600,000	2,600,000
2008年度	1,500,000	450,000	1,950,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語学

キーワード：訓点資料、文献学的研究、デジタル処理、目録、国際的共有

1. 研究開始当初の背景

(1) 訓点研究を取り巻く最近の環境変化

訓点研究を取り巻く最近の環境変化には、訓点資料のデジタル化（画像データベースのWeb上での公開）、国際化（韓国口訣学会の活動や訓読をめぐる国際会議の開催）、研究の深化（コンピュータを使った大規模処理）などが挙げられる。一方で訓点研究は、漢文古写本・古刊本の調査を前提として初めて成り立つ。訓点資料の目録や概説類はそのための有用な工具書である。しかし、それらは一度公刊されると改訂版を出すことが難しく、研究の進展に即応できない。また、訓点資料は表記上・内容上ともに複雑な構造を

持ち、文字だけで記述された情報では十分なことが伝わらない。特に訓点資料を包括的に取り扱おうとする場合、「モノ」として具体的に提示することが不可欠である。このような状況を踏まえると、基礎的な書誌情報、利用可能な画像、研究文献目録を含んだデジタル版目録を作成することが必要であると考えられる。デジタル版目録は、分散している情報を集約できること、印刷体の制約を受けないので自由な記述・編集ができること、情報交換に極めて優れていること、バージョンアップが随時可能なこと、教育的効果が期待できることなど、その価値は極めて大きい。

(2) 訓点資料の解読記述方法

一般に訓点資料を利用するには、訓点を解読することが必要不可欠である。しかし、従来の解読記述方法は、訓点に従って全体を読み下す訓読文方式か、原漢文を保ったまま訓点だけを解読する釈文方式のいずれかであった。前者はテキストとして保存・利用するには都合がよいが、加点の無い部分には恣意的な補読が加わる上に日本語以外の資料としては利用できない欠点がある。一方、後者は原漢文を保ったままであるので、漢文本文の価値を伝えることができるが、テキストとして保存・利用することが極めて難しい。いずれにしても、調査・解読した訓点資料を論文等に公表する場合、表記上、特殊な構造を持つために組版に多額の費用がかかるか、もしくは公表者自身が完成版下作成のために相当な労力を払うか、どちらかであった。研究者の中には、調査記録、移点資料、解読資料等が豊富に蓄積されていながら、これらの事情のために公表を思いとどまっているケースも多い。

韓国ではヲコト点資料の発見当初（2000年）から、座標軸を利用して客観的に解読記述することが行われている。日本においても訓読研究の国際化に対応するためには、訓点資料を国際的に共有できる客観的な解読記述方法を開発することが急務である。

本研究はこのような状況を踏まえ、訓点資料の現地調査に豊富な経験を持つ小助川貞次と、日本語学（日本語表記）・漢字情報学を専門とする高田智和が緊密な研究組織を作ることによって企画されたものである。

2. 研究の目的

(1) 訓点資料の汎用的な価値を明らかにするための基礎調査の実施

訓点資料は、日本語史資料としての価値を持つだけにはとどまらない。訓点を精密に観察することで加点当時の学問レベルがわかるし、資料全体に注目するならば、なぜそのテキストが伝来し現存しているのかという典籍受容史や学問史も分かる。さらに古写本・古刊本としての漢文本文には、通行本テキストを補訂できる本文史上の絶大な価値も有する。本研究では、このような訓点資料の持つ汎用的な価値を明らかにすることが前提作業になる。これまで調査した資料、あるいは公表されている資料について、再度原本調査を行い、テキストの持つ汎用的な価値を明らかにする。

(2) デジタル版目録の作成

従来の訓点資料目録を十分に検討した上で、必要となる画像の入手と汎用的な価値に対応する諸研究とを収集し、「デジタル版目録」を作成する。

(3) 国際的に共有できる客観的な解読記述

方法の開発

使用言語の違いを越えて利用できる解読記述方法として、従来の釈文方式をデジタル的に改良した「釈文作成システム」（漢文脈を保ったままに訓点を直接入力できるシステム）を開発する。

(4) 完成したデジタル版目録と釈文作成システムを学会等で検討

実際に運用するには、原本の所有権や論文の著作権など、クリアしなければならない問題は極めて多い。学会等において研究成果を公表し、運用上の問題点について十分に検討する。

3. 研究の方法

(1) 訓点資料の汎用的な価値を明らかにするための基礎調査の実施

国内に現存する訓点資料の内、小助川がこれまで調査を行った漢籍訓点資料について、文献学的観点から再度、現地調査を行い、記述項目の整理・検討を行う。本務校での授業・会議・業務等に支障が生じないこと、調査対象機関関係者の休暇不在期間や業務多忙時期を避け、十分な日程調整を行った上で調査を実施する。一回（一地域）の調査は5日以内とする。

(2) デジタル版目録の作成

調査の済んだ資料から順次、デジタル版目録の作成にかかる。

(3) 国際的に共有できる客観的な解読記述方法の開発

韓国における解読記述方法も十分に研究しながら、「釈文作成システム」にはどのようなプログラムやソフトウェアが適しているのか、試行錯誤を行いながら開発を行う。

(4) 研究打合せ

研究組織では常時メールで連絡を取りながら研究を進めるが、必要に応じて富山または東京で研究打合せを行う。さらに、韓国における解読記述方法についても研究する必要があるため、韓国に赴き研究協力者と研究打合せを行なう

4. 研究成果

(1) 訓点資料の汎用的な価値を明らかにするための基礎調査の実施

国内に現存する訓点資料の内、小助川がこれまで調査を行った漢籍訓点資料に加え、仏書訓点資料についても文献学的観点から現地調査を行い、記述項目の整理・検討を行った（大東急記念文庫、東京国立博物館、大谷大学図書館、高山寺、正倉院、書道博物館、武田科学振興財団杏雨書屋等）。この内、東京国立博物館調査では、記述研究に先進的な韓国口訣研究者1名を招聘し共同調査とした。さらに海外に流出した漢籍訓点資料も範囲に入れながら文献学的観点から再調査と

記述項目の整理・検討を行った（台湾国家図書館）。（図1）



図1 国家図書館蔵本史記夏本紀移点資料

(2) デジタル版目録の作成

デジタル版目録は完成には至らなかったが（図2-1）、その基礎となる多言語対応型訓読術語集について、富山大学人文学部日本語学講読で検討し作成を試みた（図2-2）。また漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について富山大学国語教育学会で研究発表（講演）を行った。さらに漢文訓読資料をデジタル処理し、その中の文字情報を有効利用するための方策について研究会を立ち上げて検討した。



図2-1 デジタル版点本書目（一部）



図2-2 多言語対応型訓読術語集（一部）

(3) 国際的に共有できる客観的な解読記述方法の開発

韓国における解読記述方法も十分に研究しながら、「釈文作成システム」にはどのようなプログラムやソフトウェアが適しているのか、春秋経伝集解巻第二（藤井有鄰館蔵本）と史記夏本紀（台湾国家図書館蔵本）を材料として、韓国側研究者2名を招聘して共同研究を行い（図3-1）、その成果を韓日国際ワークショップ（ソウル大学校奎章閣研究院）及び『訓点語と訓点資料』誌上で発表した（図3-2）。



図3-1 日韓共同研究会（2008年8月、富山大学）

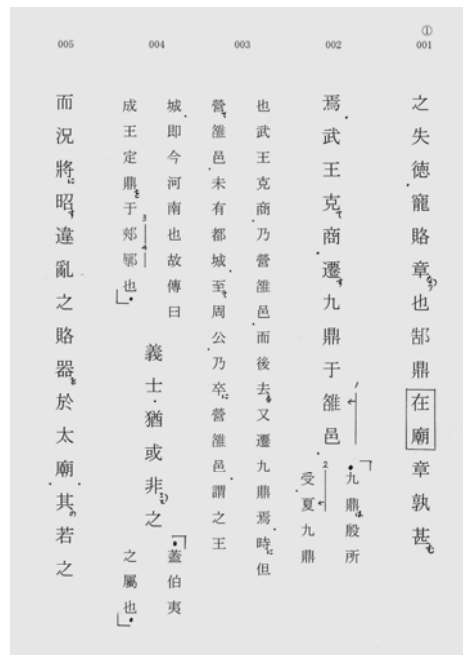


図3-2 春秋経伝集解巻第二釈文

(4) 研究打合せ

研究組織での打合せには現地での会合、通常のメールでの連絡・打合せに加え、SNS（Social Networking service）を使った新たな研究スタイルの構築を模索した（図4）。さらに韓国における解読記述方法について研究するため、韓国ソウルに赴き韓国側研修者

と研究打合せを行なった。



図4 SNSを使った情報の共有

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 小助川貞次、池田証寿、渡辺さゆり、高田智和、国家図書館(台北)所蔵本史記夏本紀積文、『訓点語と訓点資料』、第122輯、43-129、2009年、審査有
- ② 小助川貞次、訓点資料解説の方法と実際—有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』を中心に(韓文)、Seoul大学校奎章閣韓国学研究院『韓国文化』、44、319-336、2008年、審査無
- ③ 小助川貞次、漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について、『富山大学国語教育』、第33号、1-14、2008年、審査無
- ④ 小助川貞次、有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』積文及び訓読文、『訓点語と訓点資料』、第120輯、76-122、2008年、審査有

〔学会発表〕(計4件)

- ① 小助川貞次、日本における『文選』の伝来と受容、北海道大学文学部日本漢文学課外特別講義、2008年11月8日、北海道大学文学部
- ② 小助川貞次、訓点資料解説の方法と実際—有鄰館蔵『春秋経伝集解卷第二』を中心に、2008韓日国際ワークショップ「古代韓日の言語文化比較研究」、2008年2月21日、ソウル大学校奎章閣韓国学研究院
- ③ 小助川貞次、(講演) 古代日本の言語—文献学的観点から見た日本語の変容と継承、ソウル大学校人文学研究院言語研究所プロジェクト、2008年2月18日、ソウル大学校人文学研究院言語研究所
- ④ 小助川貞次、(講演) 漢文訓読研究の国際的共有と教育的還元について、第36回富山大学国語教育学会、2007年11月10日、富山大学人間発達科学部

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小助川貞次 (KOSUKEGAWA TEIJI)
富山大学・人文学部・教授
研究者番号：20201486

(2) 研究分担者

高田智和 (TAKADA TOMOKAZU)
国立国語研究所・開発研究部門・研究員
研究者番号：90415612

(3) 研究協力者

池田証寿 (IKEDA SHOJU)
北海道大学大学院・文学研究科・教授
研究者番号：20176093
渡辺さゆり (WATANABE SAYURI)
札幌大学・文化学部・准教授
研究者番号：10382459
呉美寧 (OH MI-YOUNG)
(韓国) 崇実大学校・人文大学・副教授
朴鎮浩 (PARK JIN-HO)
(韓国) 漢陽大学校・人文科学大学・助教